

老人とくるま

景山 克三

日本大学名誉教授

高齢者の運転による交通事故が近年増加しつつあるとのことである。「これは憂慮すべき傾向だ」「至急何か対策を……」ということになり、「運転免許に最高年齢制限を設けてはどうか」「高齢者の運転免許更新を難しくして、事実上禁止の方向にもっていったらどうか」と考えた人が一部にあったことは事実である。考えてみると、高齢者人口の増加は当然のことながら外出する老人の増加の傾向をもたらし、したがって老人による交通事故の増加をもたらすのは当然のことであろう。核家族化の進んだ今日、老人でも外出しなければ生活できないのが実状である。早い話が、毎日に必要な生活物資の購入にも老人なればこそくるまが必要であるし、くるまに乗らなければ老人は病院にも通えないという現実がある。安易に運転免許の年齢制限なんかを考えるのは、「老人は早く死ぬ」と言うに等しい。高齢者の運転は、ほんとうに禁止しなければならないほど危険なものなのか。

人間を統計で扱う場合、人間の質の違いを区別することは困難であるため、どうしても区別の容易な男女の別と年齢だけで人間を分類することになってしまう。その結果、「男性はこうで女性はこうだ」とか「若者はこうで老人はこうだ」というような結論が安易に導かれる傾向がある。性別と年齢だけで人間を分類しても、あまり大きい誤りのないものは、体力の限界を競うスポーツの成績である。例えば100mを何秒で走れるかとか、腕立て伏せを連続何回やれるかというようなものなら性別と年齢でかなり明らかな傾向があろう。しかしこれとても個人差が大きいことも事実である。

ところが、くるまの運転は決して体力の限界を競うスポーツではない。一般に「若者は行動が素早く、老人は動作が緩慢である」と考えられている。このことは歩行行動においては当てはまるとしても、運転行動には必ずしも当ては

まらない。意外に若者の中にノロマな運転をして周囲に迷惑をかける者がいることは日常よく見かけるところである。危険な運転についても同様で、それは年齢よりも人間の質によるところが大きいのである。

私は今年74歳で、世間では老人の部に入れられることは間違いない。若い頃には1日に700kmを走って翌日また700kmを走っても平気だったが、近頃は300kmが自分の限界だと思うようになった。体力の衰え、特に持久力の衰えは残念ながら認めざるを得ない。しかし肉体的な衰えを本人が自覚していれば運転には何の問題もないのである。老人だから運転は危険だということにはならない。



私は現在、2座席ミッドシップのスポーツカーを愛用している。「老人のくせに突っ張っている」と陰口をたたく人もあるようだが、別に突っ張っているわけではなく、まるで裸足で路面を蹴って走るような感触が伝わってくる、あの感覚を楽しんで走っているのである。子供達が独立してしまった老夫婦には2座席のスポーツカーが最適のくるまだと思っている。日本ではとかく、「スポーツカーはドラ息子の乗るもの」のように思われ勝ちだが、スポーツカーに年齢制限はない。体力は衰えても、普通の運転ならまだ若者には負けないという自負心のある限り、この次に買うくるまも2座席のスポーツカーにしようと思っている。

日米・思い出・断片記

漆原美代子

環境デザイナー・エッセイスト

最近、日本文学者ドナルド・キーンによる『日本語の美』や、同じく米国生まれの学者、アレックス・カーの『美しき日本の残像』といった題名のエッセイ集を続けて読んだ。もちろん、この二人は、卓越した知識と感受性、突出した専門家と教養人の顔を合わせ持った特別の国際人ではある。それにしても改めて考えさせられたのは、日本固有の文化や自然について、固定観念ぬきで語れる人は、最早、国籍などと無縁になりつつある、ということであった。

私がドナルド・キーン氏とはじめてお会いしたのは、今から30余年前のニューヨーク。私は、まだ市内の芸大に通う学生的身であったが、東京新聞の特派員をしていた友人と、彫刻家イサム・ノグチ氏などのお誘いを受け、あの頃『近代能楽集』の英訳だか上演だかの話で、たしかグリニッチ・ヴィレッジに滞在中の三島由紀夫氏と途中でジョインして、キーン氏のアパートでのカクテル・パーティーにお供している。キーン氏のアパートの室内は簡素であったけれど、十分に広く、百人くらい集まっていた。いかにもニューヨークならではの、こなれた知的雰囲気と、アーチスト風のボヘミアンの香りが混りあったあの夜の会話の断片やダンスの情景は、つい昨日の出来事のように懐かしく思い出される。

さて、私はニューヨークを“第二の故郷”とする一東京人だが、キーン氏やアレックス・カー氏らほど、日米両国にわたる深く広い認識や洞察力を持っているとは到底言いがたい。ただ一つ、しかし、あのマンハッタン島の十分の一近くを占める広大な中央公園とその周辺との地縁と個人的関歴に限れば、いわゆる普通のニューヨークでは想像のつかない種類の、親近した世界が私の裡に出来上がっているかもしれない。なにしろ、ニューヨークを訪ねる度に、時間とお天気にも恵まれれば、公園での乗馬による

“田園風都市空間探索の小旅行”をたのしむ習慣しが身について凡そ20年。二～三人の乗馬仲間と誘い合い、一九世紀末以来、「車道」や「歩道」^{トレイル}とも立体的に分離されている「乗馬道」の緑陰を駆けたり、石造の橋のアーチの下をゆっくりと通りぬけたりする時……。私は何だか抱擁力のある“大地”にしっかりと支えられているみたいな安定した幸福感に酔うことさえできる。

ある夏の暑い午後。二時間余の乗馬のあと、のどの渴きを感じた私たちは、公園内の有名なレストラン（Tavern On The Green）^{ブラス}の中庭前にさしかかり轡を並べた。

その時は乗馬アカデミーのオーナーで馬術家としても知る人ぞ知るポール・ノボクラド氏（何と彼は青年時代に京都大学に留学、日本庭園を専攻している！）と一緒に、このカフェ・レストランのマネージャーとも旧知の間柄だったことから、私たちは“馬乗での冷たいコーラ”というエレガントで幸運な贈り物を受けることができた。ほんとうに、至福の一杯——といえる思い出。

キーン氏らと共に三島由紀夫氏に会った頃の氏のニューヨークの印象記には、無機的で非情な指摘が目立つ。例えば「ニューヨークでは唯一の自然を残している中央公園さえ、昼間は年金生活者のさびしい老人たちの日向ぼっこの場所にすぎない」とか。やはり馬好きの“世界のミシマ”が、もしもっと深く中央公園と親しむ体験を持っておられたら、全く違ったものになっていたかもしれない。

そういえばこの六月に亡くなったジャクリーヌ・ケネディ未亡人も、あそこで乗馬をしたり、恋人との散歩をたのしんだとか。中央公園は、あの劇的な人生の光と影を生きたジャクリーヌの晩年の日々を折にふれて優しく飾った舞台の一つでもあったのであろう。